

比 恵 5 4

—比恵遺跡群第111次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1004集

2008

福岡市教育委員会

比 恵 5 4

—比恵遺跡群第111次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1004集



遺跡略号 HIE-111

調査番号 0666

2008

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。そのため福岡市域には多くの遺跡が残されています。近年の著しい都市化による開発により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、事務所ビル建設に伴い実施した比恵遺跡群第111次発掘調査について報告するものです。今回の調査では弥生時代後期頃の掘立柱建物・土壙などが発見されました。これらは地域の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで多くのご協力を賜りました関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は事務所ビル建設に伴い、福岡市教育委員会が福岡市博多区博多駅南4丁目9-32において実施した比恵遺跡群第111次発掘調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。
3. 本書に掲載した遺物実測図は阿部が作成した。
4. 本書に掲載した挿図の製図は阿部がおこなった。
5. 本書に掲載した写真は阿部が撮影した。
6. 本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より約6°30'西偏する。
7. 本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成6年3月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性がある。詳細は福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課にて確認されたい。
8. 遺構の呼称は掘立柱建物をSB、溝をSD、土壙をSK、ピットをSPと略称する。遺構番号は重複を避けるため現場で付した通し番号を原則そのまま用いている。
9. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
10. 本書の執筆・編集は阿部が行った。
11. 本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

遺跡調査番号	0 6 6 6		遺跡略号	H I E - 1 1 1	
地番	福岡市博多区博多駅南4-9-32		分布地図番号	No.037 東光寺	
開発面積	601.47m ²	調査対象面積	221.14m ²	調査面積	163.5m ²
調査期間	平成19年2月7日～2月28日				

本文目次

はじめに	1
第1章 位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第2章 調査の記録	5
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	5
①掘立柱建物 (SB)	5
②溝 (SD)	6
③土壙 (SK)	8
④ピット出土の遺物	11
⑤搅乱出土の遺物	12
3. 小結	12

挿図目次

Fig. 1	比恵遺跡群と周辺の主な遺跡 (1/25,000)	2
Fig. 2	調査区位置図 (約1/4,000)	3
Fig. 3	調査区位置図 (1/500)	4
Fig. 4	調査区南西壁土層断面実測図 (1/80)	5
Fig. 5	調査区全体図 (1/200)	6
Fig. 6	SB05実測図 (1/40)	7
Fig. 7	SB05出土遺物実測図 (1/3)	8
Fig. 8	SD09実測図 (1/30)	8
Fig. 9	SD09出土遺物実測図 (1/3)	8
Fig.10	SK10実測図 (1/30)	9
Fig.11	SK10出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig.12	SK23・24実測図 (1/30)	9
Fig.13	SK23・24出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig.14	ピット出土遺物実測図 (1/3)	11
Fig.15	擾乱出土遺物実測図 (1/3)	11

図版目次

PL.1-1	調査区東部全景 (北より)
PL.1-2	調査区西部全景 (北より)
PL.2-1	SB05 (西より)
PL.2-2	SK23・24 (北より)
PL.3-1	SK23遺物出土状況 (北より)
PL.3-2	SK24土層断面 (東より)

はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課（以下、埋文1課）は、長岡商事株式会社から博多駅南4丁目9-32における自社事務所ビル建設工事に伴う埋蔵文化財事前審査願の提出を2006（平成18）年11月24日付で受けた。申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれていることから、同年12月22日に確認調査を実施した。その結果、削平を受けているとみられるものの深い遺構は残存しており、予定建築物による影響は大きいと思われた。この成果を元に両者で協議を行い、建物建設予定部分について本調査を実施することで合意した。その後委託契約を締結し、2007（平成19）年2月7日から発掘調査開始、翌平成19年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

なお、調査全期間を通じて長岡商事株式会社ならびに施工業者の関係各位には様々な便宜を賜り、調査は大きな事故等もなく概ね順調に完了しました。紙上ではありますがここに記して深く感謝申し上げます。

2. 調査組織

調査委託：長岡商事株式会社

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査總括：埋蔵文化財第2課 課長 力武卓治

同課調査第1係長 池崎謙二（前任） 杉山富雄（現任）

調査庶務：文化財管理課 後藤泰子（前任） 井上幸江（現任）

事前審査：埋蔵文化財第1課 事前審査係長 濱石哲也（前任） 吉留秀敏（現任）

同係主任文化財主事 吉留秀敏（前任） 宮井善朗（現任）

同係文化財主事 本田浩二郎（前任） 上角智希（現任）

調査担当：埋蔵文化財第2課調査第1係 阿部泰之

調査作業：唐島栄子 伊藤美伸 林厚子 布江孝子 関哲也 乾俊夫 宗像正勝 小野山次吉 坂

梨美紀 平田周二 近藤末孝 上野照明

整理作業：塙田慧 黒早苗 白須正枝



Fig. 1 比恵遺跡群と周辺の主な遺跡 (1/25,000)

第1章 位置と環境

1 地理的環境

現在の行政区では福岡市博多区にあたる福岡平野は、北西方面で博多湾に面し、東を立花山（367m）を主峰とする立花山山地、南と西を背振山系とそこから派生する丘陵によって囲まれた地域である。背振山系から発する那珂川と牛頭・四王寺山地から発する御笠川が平野部を貢流して博多湾に注ぎ、その沖積作用によって形成された平野といえよう。背振山系と牛頭・四王寺山地は現在の行政区でいう太宰府市で近接し地峡部を構成する。那珂川と御笠川にはさまれたエリアは中位段丘となり、上部を阿蘇山由来の火砕流堆積物によって構成される洪積台地である。

比恵遺跡群はこの台地の北端部分に形成された遺跡群である。

2. 歷史的環境

比恵遺跡群が立地する台地は現在の行政区でいう春日市に達し、数多くの重要な遺構・遺物が検出されている。先土器時代の遺物は18次調査で出土しているが明瞭な文化層を形成するものではない。縄文時代の遺物は概して少なく、本格的に人間が進出するのは弥生時代前期からである。中期後半には遺跡全域に遺構が分布する。終末期に台地中央部を貫くいわゆる道路状遺構が構築される。古墳時代は那珂八幡古墳をはじめとする前期古墳・周溝墓群が形成されるが生活遺構は減少する。増加するのは後期に入ってからである。古代は大形掘立柱建物・正方位を指向する溝が那珂遺跡群を中心に各所に形成され、官衙的様相を呈する。中世以降再び遺構は減少し、農村集落となり現在に至る。

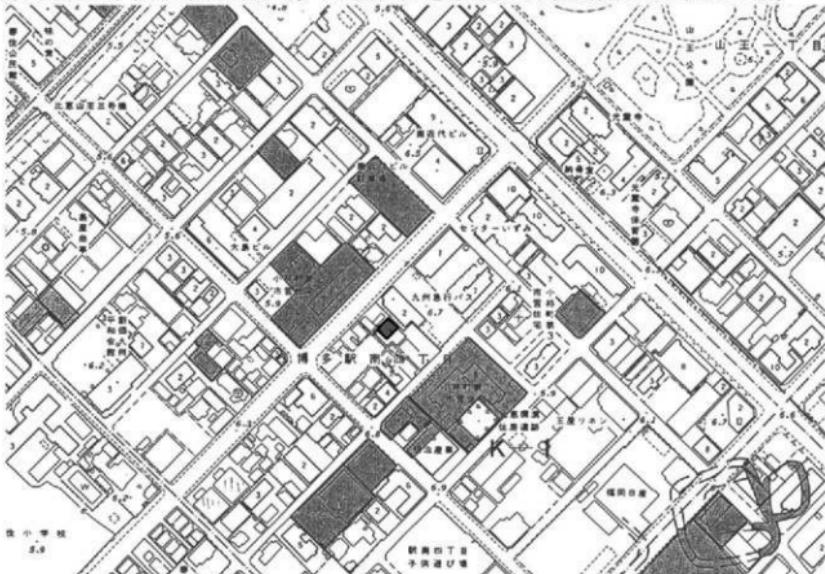


Fig. 2 調査区位置図（約1/4,000）

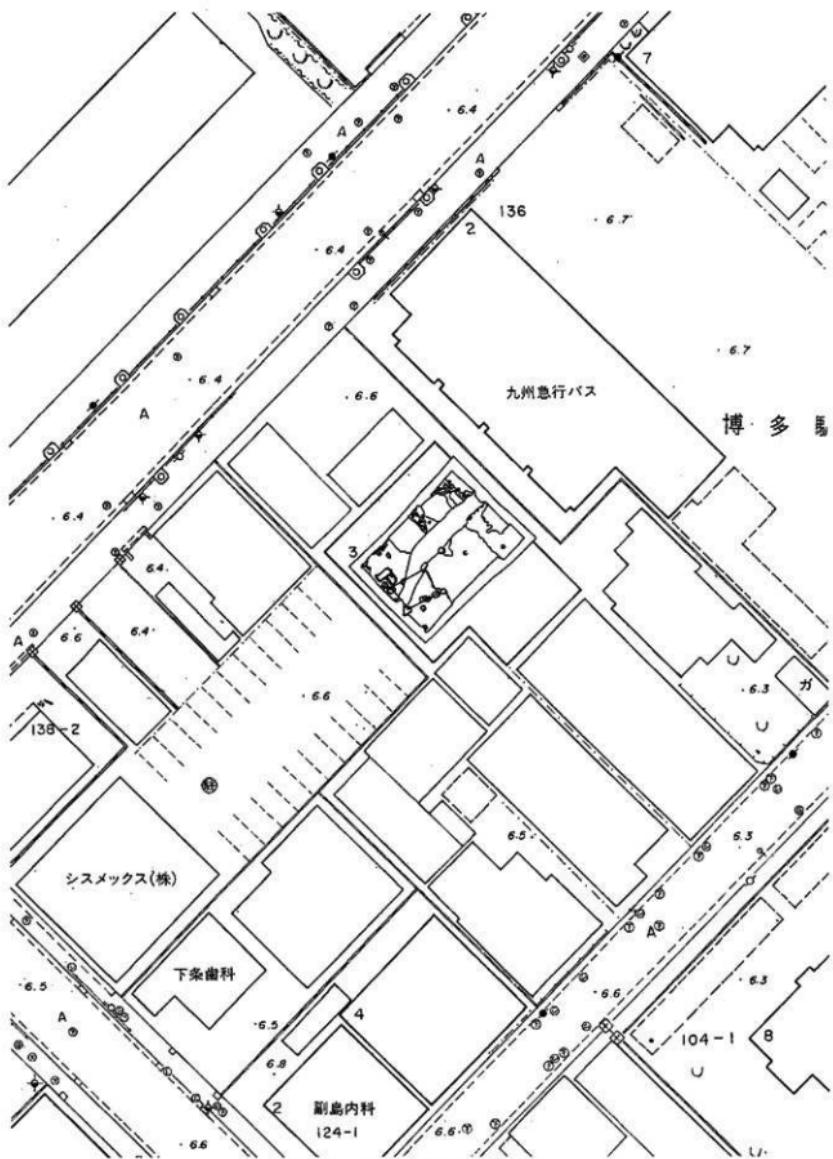


Fig. 3 調査区位置図 (1/500)

第2章 調査の記録

1. 調査概要

今回の調査地点は比恵遺跡群のほぼ中央に位置し、山王公園から南西に約250mを測る。現地表面から-80cm、標高5.9m付近で遺構検出面の八女粘土層に到達する。

今回の調査では、弥生時代後期の掘立柱建物1棟・土壤3基・建物を構成しないピットを検出した。調査地は昭和初期以前に開墾された用水路の跡が中央部を横断する。既存建物の基礎構築に伴う搅乱が多い。さらに調査地全面にわたって区画整理の伴うとみられる削平がなされており遺構検出面は遺構の残りは悪い。遺物は弥生土器がコンテナケース4箱程度出土した。大半が後期の範疇に属するものである。その他中期後半と推測される土器片が遺構埋土に混入する形で少量出土した。

2. 遺構と遺物

①掘立柱建物 (SB)

SB05(Fig. 6)

調査区西部で検出した。長軸を東西方向にもつ1間×2間の建物である。中央に用水路の跡が走り北側の柱穴が切られている。柱穴は不整円形または長方形を呈し長径60~90cmを測る。深さは20~45cm前後を測り、削平のためか浅い。柱痕跡は南側柱穴で2箇所検出した。径25cm前後の円形で柱穴の底面に接している。埋土は地山のロームをブロック状に含む黒褐色土で、底面まではほぼ変化なく堆積する。柱痕跡は混雜物のすくない黒褐色土で構成される。柱穴の並びは不揃いで柱間の間隔は一定ではない。南北の柱筋は柱穴の中心同士で2.4~2.6mの間隔である。

出土遺物 (Fig. 7)

1・2は弥生土器である。1は壺である。口縁部から頸部にかけての小片で大形の個体か。頸部外面直下に断面台形の突起を1条有する。器表にハケメが観察され、残存高10.5cmを測る。2は壺である。口縁部から頸部にかけての小片で断面くの字形を呈する。器壁は磨滅し調整は不明。残存高4.6cmを測る。3・4は土器器である。3は壺である。二重口縁壺の口縁部の小片で、口径17.8cmに復元され、残存高3.7cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明である。4は壺である。口縁部の小片で、器形は須恵器の壺に似せて作られる。口径20.3cmに復元され、残存高3.6cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明である。5は弥生土器壺である。底部の小片で、底径6.7cmに復元され、残存高2.7cmを測る。器壁は磨滅するが、

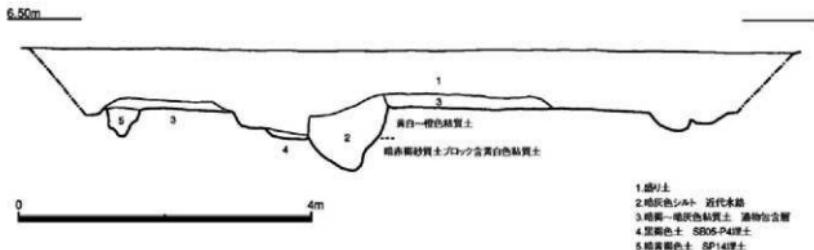


Fig. 4 調査区南西壁土層断面実測図 (1/80)

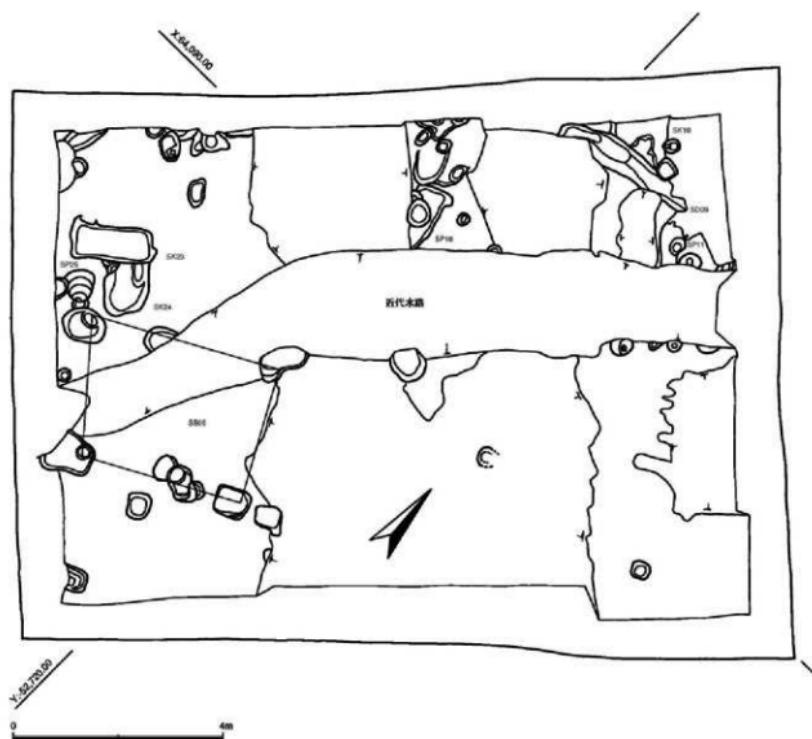


Fig. 5 調査区全体図 (1/200)

底部付近の外面にクテハケが観察される。6は土製投弾である。完形で出土し長径3.4cm・短径2.1cm・重量10.2gを測る。ユビオサエ痕が全面にみられるが1箇所板状の工具で強く押された痕跡が観察される。

②溝 (SD)

SD09 (Fig. 8)

調査区北端で検出した。東西方向に延びる溝である。西の立ち上がりは調査区内で検出され、東は搅乱に切られている。上端のラインはやや出入りを有するがおおむね一定方向を指向し、西端をわずかに南に向ける。今回の調査では延長2.88mにわたって検出した。

SD09の断面形は逆台形を呈しどの部分もその傾向は変わらない。深さは7cm～20cmと浅い。調査区全域にわたって大規模な削平がなされているとみられることから、本来この溝はさらに深くなるものと推測される。

埋土は暗褐色を呈する粘質土で、底面まではほぼ均一な堆積状況であった。埋土からは流水の痕跡は覗えない。

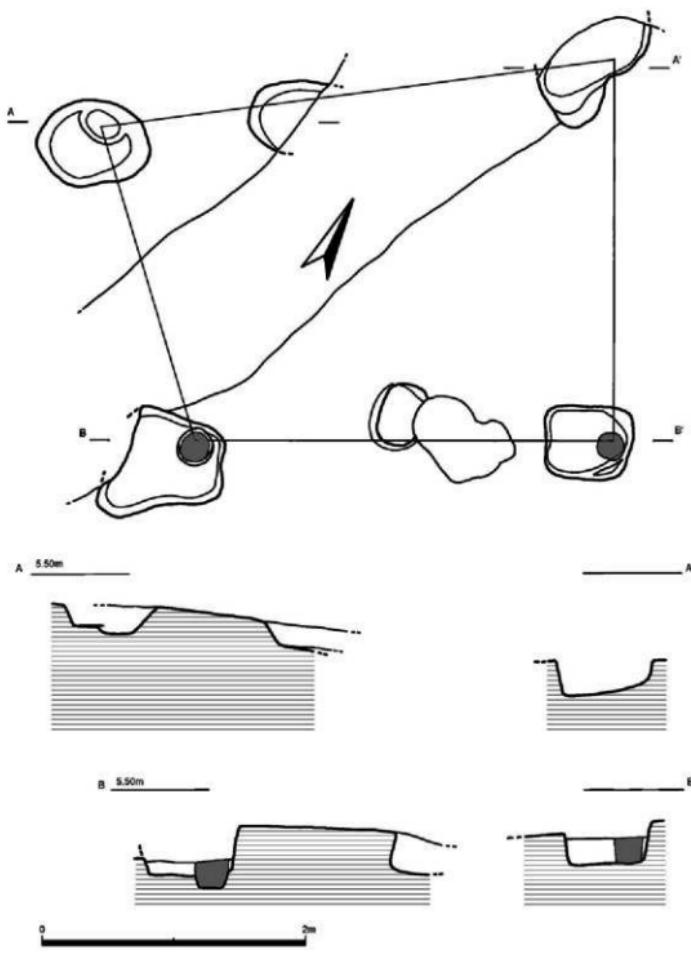


Fig. 6 SB05実測図 (1/40)

出土遺物 (Fig. 9)

1は弥生土器壺である。口縁部～頸部・肩部上端にかけての小片で、おそらく大形の壺であろう。口径を復元するには至らなかった。断面はくの字形を呈し、頸部直下に断面三角形を呈する突帯を1条有する。器壁は磨滅し、外面調整は不明である。2は弥生土器である。壺の底部で、肩部の下端が残存する小片である。残存する外底面は概ね平坦で残存高3.1cmを測り、底径7.0cmに復元される。外面は器

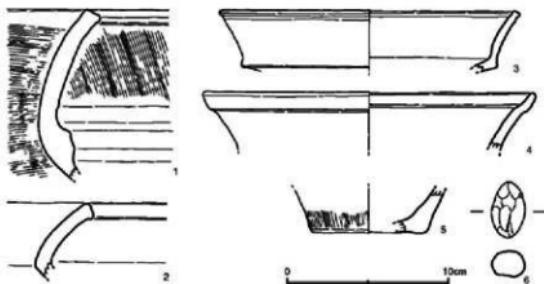


Fig. 7 SB05出土遺物実測図 (1/3)

壁が磨滅し調整は不明瞭だが、内面にはユビオサエ痕が観察される。

上記何れの土器も胎土は精良で、焼成は良好である。

③土壤 (SK)

3基検出した。うち2基は壁面が立ち、しっかりした造構である。この2基は互いに切り合う。その他の1基は不整で浅い。

SK10 (Fig. 10)

調査区南端で検出した不整形の土壤である。ここでは暫定的に土壤として報告する。浅い土壤で造構の南部を前述の溝SD09に切られ、東部は攪乱に遭している。調査区の隅角部にかかる形で検出されたため造構の壁面は西壁・南壁の一部分を残すのみである。平面形は残された部分から推測すれば不整形で、方形または円形といった体裁をなさないとみられる。底面はほぼフラットである。深さは5cm~10cmを測り、浅い。埋土は暗褐色土で底面までほぼ均一な堆積状況であった。

出土遺物 (Fig. 11)

1は弥生土器甕である。口縁部から胴部にかけての小片で、口径24.0cmに復元される。残存高は3.4cmを測る。口縁部上面はやや上方に膨らむ。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。断面には粘土帯の接合痕が観察される。2は弥生土器である。甕の小片で、口縁部から胴部にかけて残存している。口径22.8cmに復元され、残存高2.7cmを測る。口

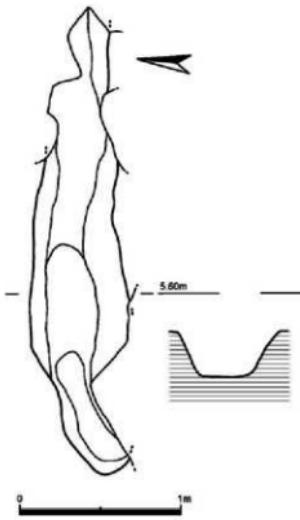


Fig. 8 SD09実測図 (1/30)

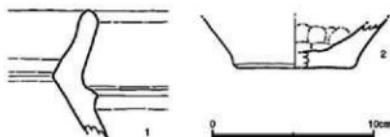


Fig. 9 SD09出土遺物実測図 (1/3)

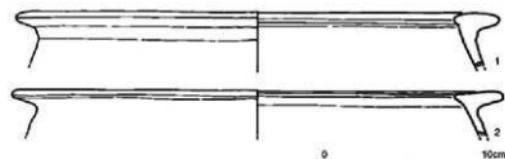
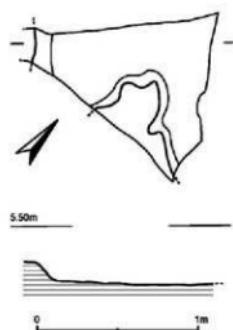


Fig. 11 SK10出土遺物実測図 (1/3)

縁部の上面はほぼフラットである。断面には粘土帯の接合痕が観察される。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。

上記何れの個体も胎土は精良で焼成は良好である。

SK23 (Fig. 12)

調査区西部で検出した土壙である。長軸を北東—南西方向に向ける。隅丸長方形を呈し、長径1.55m・短径66cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壁面はほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。埋土と地山の境界は明瞭でしっかりした構造である。埋土は黒褐色土で下部は地山のロームが多くブロック状にはいる。底面近くから自然石・土器片が出土したが、投げ込まれたような状況である。土壙墓の可能性も有するが、現場では積極的な根拠は見いだせなかった。

出土遺物 (Fig. 13)

すべて赤生土器である。1は甕である。口縁部から胴部にかけての小片で口径16.6cmに復元される。残存高は4.2cmを測る。胴部外面にタテハケが観察され、その他の部分はナデにて調整される。2は鉢である。口縁部から胴部にかけての小片で口径19.4cmに復元される。口唇部は外面に向かって肥厚している。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。3は高壺の壺部である。口縁部から胴部にかけての小片で口径31.0cmに復元される。外面は器壁が磨滅するが、内面ともヨコハケが観察される。残存高9.1cmを測る。4は高壺の脚部である。底部の一部とつきぶを欠損する。底径14.0cmに復元され、残存高14.5cm

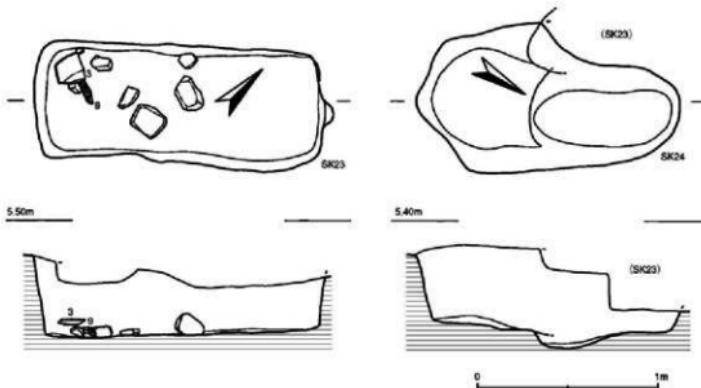


Fig. 12 SK23・24実測図 (1/30)

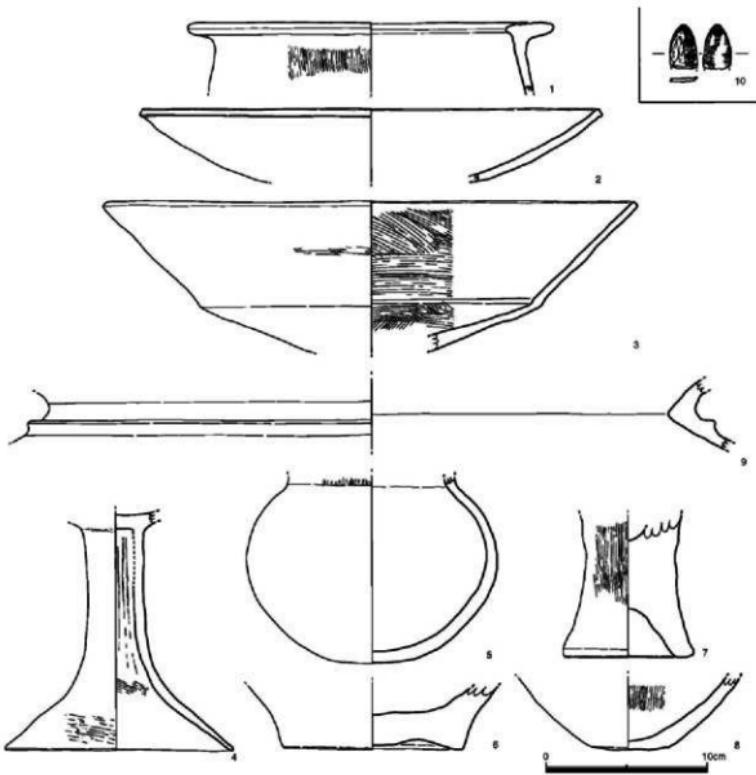


Fig. 13 SK23・24出土遺物実測図 (1/3)

mを測る。5は短頸壺である。底部はほぼ丸底を呈する。口縁部を欠損し、胴部を1/2残す破片である。胴部最大径15.4cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明瞭だが、頸部周辺にタテハケが観察される。6は壺である。底部の小片で底径11.6cmに復元される。底部はわずかな上部底状で器表はナデで調整される。残存高3.8cmを測る。7は支脚である。上部を欠損し底径8.0cm・残存高7.7cmを測る。上部は縁が欠けておりさほど大きくなるものではない。外面にタテハケが観察される。8は壺である。底部の小片で底面は丸みを帯びる。底径4.9cm・残存高4.5cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明瞭だが、内面にタテハケが観察される。

SK24 (Fig. 12)

調査区西部で検出した不整椭円形の土壙である。SK23に切られ、長軸はSK23と直交させる。長径1.48m・短径82cmを測る。深さは56cmを測り、壁面は垂直に近く立ち上がる。埋土と地山の境界は明瞭でしっかりした造構である。埋土は黒褐色土で下部は地山のロームが多くブロック状にはいる。底面は南部にテラスを有しやや起伏がみられるが概ねフラットである。

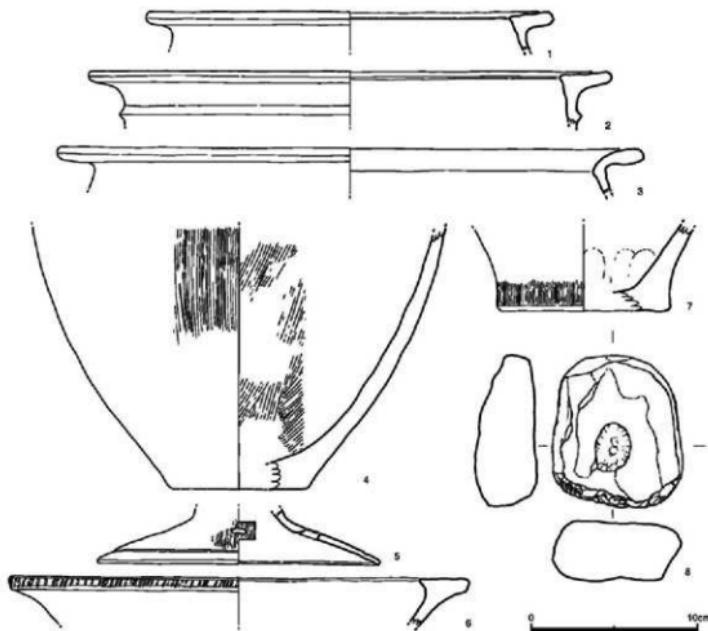


Fig. 14 ピット出土遺物実測図 (1/3)

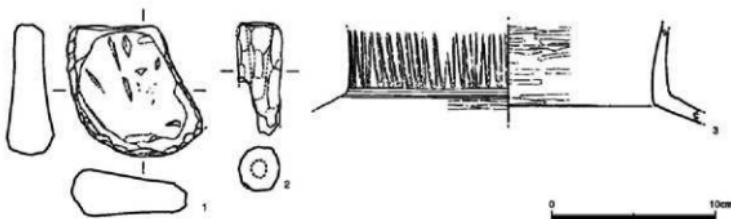


Fig. 15 摂乱出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig. 13)

10は磨製石錐未成品である。下部を欠損する。サヌカイト様の安山岩質の石材を用い剥片を紡錘形に研磨し成形している。中途で折損したものの、残存長2.7cm・幅1.7cm・重量1.6gを測る。

④ピット出土の遺物 (Fig. 14)

1~7は弥生土器である。1~3は甌である。いずれも口縁部~胴部にかけての小片。1はSP25出土であ

る。口径19.4cmに復元され、残存高2.3cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。2・3はSP11から出土した。2は口径25.4cmに復元され、残存高3.2cmを測る。口縁部下に断面三角形の突帯を1条有する。3は口縁部が内傾しややくの字形を呈する。口径29.6cmに復元される。残存高2.7cmを測る。何れの個体も器壁は磨滅し調整は不明瞭である。4はSP18出土の壺である。底部から胴部下半にかけての小片で、底面はほぼフラットである。残存高15.8cmを測る。底径は8.0cmに復元される。胸部外面は下部の器壁が剥落し火にかけられていた可能性を有する。スヌ状の黒色の付着物が所々に観察される。内外両面ともタテハケによって調整されるが、内面のハケは外面のそれに比しやや疎である。5は高壺である。SP11出土。脚部の小片で、底径16.8cmに復元され、残存高3.3cmを測る。中ほどに孔を有し、焼成前に外面から穿孔したと推測される。外面下部にわずかな段が観察される。器壁は磨滅し調整は不明瞭だが、外面には縱方向のハケが観察される。6・7はSP25出土。6は壺である。口縁部から頸部にかけての小片で、断面形は鉢形状を呈する広口壺である。口縁部上面はほぼフラットで、外周に密で浅い刻み目を有する。口径11.8cmに復元されるが、小片のため不確実である。残存高2.9cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。7は甕である。底部の小片で、底径9.7cmに復元され、底面は平底である。残存高5.2cmを測る。器壁は磨滅するが底部付近の外面にタテハケが観察される。内面はオサエ・ナデにて調整される。上記何れの土器も胎土は精良で、焼成は良好である。8は叩石である。灰白色を呈する花崗岩質の円礫を用いる。上面および縁辺部に打痕が観察される。特に下部は斑晶が剥落し何か堅硬なものを叩いている。縁辺部周辺には擦痕も観察され、磨石としても使用されている。長径9.2cm・短径7.9cm・重量428gを測る。

⑤機乱出土の遺物 (Fig. 15)

調査区中央の用水路跡および建物基礎跡から出土した遺物である。1は叩石である。粒子の粗い砂岩質の円礫を用いている。梢円形の石皿を転用し砥石としても使う。縁辺部に打痕が観察され、擦痕もみられることから磨石としても使っている。長径8.0cm・短径6.0cm・重量256gを測る。2は土製品である。棒状の芯に粘土を巻き付けて成形する。下部を欠損し鍼のようだが中央の孔は貫通していない。残存長6.8cm・径2.5cm・重量4.3gを測る。胎土には砂粒をあまり含まない。3は弥生土器壺である。頸部から胴部にかけての小片で、外面・頸部内面に丹塗り痕が観察される。残存高5.0cmを測り、頸部径19.6cmに復元される。頸部外面に連続するW字形に暗文が施される。頸部内面は横方向のヘラミガキである。2・3とも胎土は精良で焼成は良好である。

3. 小結

今回の調査では、掘立柱建物1棟・溝1条・土塙3基を検出した。調査区が狭小で遺構面が削平を受けたこともあり検出遺構は少ない。

掘立柱建物SB05は1間×2間の建物である。今回の調査地点の南東および北西で第6次・第7次調査が実施されている。これらの調査地に於いて同様の構成をもつ掘立柱建物が検出されており、とくに第7次調査地の東部で検出された建物群に連続すると推測される。長方形の土塙は周辺の調査地に検出例がなく具体的な性格はよくわからない。しかし第6次調査地で墳丘を有するとみられる壺棺墓群が検出されており、距離は離れるが土塙墓など埋葬遺構の可能性を否定できない。しかし壺棺墓群の時期は弥生中期の範疇に収まり、土塙の時期は弥生後期なので時期が合わない。

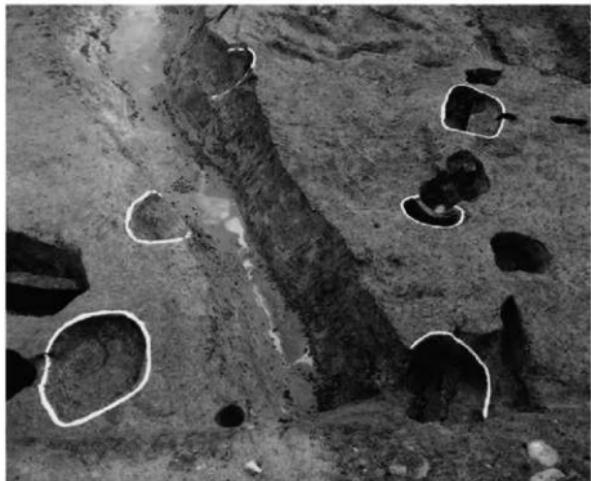
調査地の標高は周辺の調査地に比し低く、現・山王公園の方に延びる谷とみられる。今回の調査は台地上の微地形である谷部の調査であり、遺構の少なさも削平のためばかりではなく地形上の理由もあると推測される。



1 調査区東部全景(北より)



2 調査区西部全景(北より)



1 SB05(西より)



2 SK23-24(北より)



1 SK23遺物出土状況(北より)



2 SK24土層断面(東より)

報告書抄録

ふりがな	ひえ				
書名	比恵				
副書名	比恵遺跡群第111次調査報告				
巻次	54				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	1004				
編著者名	阿部泰之				
編集機関	福岡市教育委員会				
所在地	福岡市中央区天神1-8-1				
発行年月日	2008年3月31日				
調査面積	163.5m ²				
調査原因	事務所ビル建設				
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)	(世界測地系)
比恵遺跡群第111次	福岡県福岡市博多区博多駅前4-9-32	40132	0127	33° 34' 48"	130° 25' 46"
比恵遺跡群第111次	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
比恵遺跡群第111次	集落	弥生時代後期	掘立柱建物1+隠1+	弥生土器	弥生後期の掘立柱建物
			土壙3		
要約	今回の調査では、弥生時代後期の掘立柱建物1棟・土壙3基などを検出した。削平が激しく遺構・遺物ともに少ないが、道路を挟んで南に隣接する7次調査でも弥生時代後期の大形掘立柱建物群が検出されており、今回検出した掘立柱建物はそれに続く遺構と推測される。				

比恵54

—比恵遺跡群第111次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1004集

平成20年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社ゼネラルアサヒ
福岡市東区松田3丁目777番